

2013年度事業報告書

公益財団法人 東洋文庫

2013年度 公益財団法人東洋文庫事業報告書

公益財団法人 東 洋 文 庫
理事長 榎 原 稔

2013年4月1日～2014年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫事業報告の概要は下記の通りです。

事 業 項 目

I	調査研究.....	2
II	資料収集・整理.....	11
III	研究資料出版.....	11
IV	普及活動.....	12
V	学術情報提供.....	17
VI	地域研究プログラム.....	22

I. 調査研究

A. 超域アジア研究

超域アジア研究部門

(1) 総合アジア圏域研究班

「総合アジア圏域研究」

基本的な研究方法は、年度ごとに重点地域を定め、それをアジア規模の視野から多角的に検討するとともに、周縁諸地域との地域連関や相互影響関係を検討する。範囲は、基礎資料研究、現地研究、主題研究などに跨り、多分野にわたる国際的な比較研究を行う。また、資料、検討過程並びに研究成果は、欧文にてオンラインにより発信する。このような総合的アジア研究は、アジア諸地域における資料収集と地域研究の蓄積を持ち、内外の研究連携を進めてきた東洋文庫においてのみ可能であると考えられる。

東洋文庫のすべての研究班の参加によって行われる重点研究としてこの「総合アジア圏域研究」があるが、基本的な検討項目は、各年度において選択した1つの地域のアジア圏域間における位置と役割、地域間移民ネットワーク、ディアスポラ、トランスナショナル問題を検討する。ワークショップを開催して議論を重ね、現地調査・資料調査によって現代の諸問題を歴史的背景を含め提示する。これらの討論過程を、ワーキングペーパーや電子ジャーナルにおいて発信し、さらに議論を広げていくことを目指す。

〔研究実施概要〕

- a) 昨年に引き続き、東洋文庫所蔵の貴重書を用いた講習会「アジア資料学研究シリーズ」を開始した。今年度は、「西洋古典籍書誌講習会－西洋書籍と東洋研究」として2日間、「東洋のCodicology－文理融合型東洋写本・版本学Ⅱ 非漢字文献」として3日間、のセミナーを開催した。内外の書誌学研究者、研究資料館からの応募があり、このうち先着で24名の参加を得た。
- b) インド研究班、東南アジア研究班がコーディネーターとなり、インド・東南アジア圏域シンポジウム”State Formation and Social Integration in Pre-modern South and Southeast Asia” (The Second International Symposium of Inter-Asia Research Networks) を開催した。シンポジウムは2日間行われ、のべ113名の参加者を得て、活発な討論が行われた。
- c) 若手研究者の国際的な研究成果発信を支援するため、昨年に引き続き、国立シンガポール大学出版のポール・クラトスカ氏を招き、セミナー“Scholarly Publishing in English: What Editors Expect”を開催した。東洋文庫に籍を置く若手研究員および日本学術振興会特別研究員が参加し、クラトスカ氏より英文研究論文の作成について指導をうけた。

(2) 現代中国研究班

「現代中国の総合的研究(2)」

現代中国は、政治、経済、社会の大改革を行い、その影響力は東アジアから広く世界に及びつつある。この動態を、歴史・文化の要因をも視野に収めながら、総合的に捉える研究体制(資料、政治、経済、国際関係・文化の各グループで構成)を構築した。資料の収集は東洋文庫の蓄積を基点としつつ、学際的研究と公開利用に向けて拡充と再編をはかる。その際、台湾中央研究院や中国社会科学院、ハーバード・エンチン研究所との学術交流など、海外・国内の研究機関との連携をいっそう強化し、政治、経済、国際関係・文化グループは研究会の開催を継続実施し、次年度以降における成果の刊行に備える。

〔研究実施概要〕

- a) 資料グループは、2011年度に刊行した和文論叢『モリソンパンフレットの世界』をもとに、引き続き東洋文庫が所蔵する近代中国関係資料の中心をなすモリソン・パンフレットを整理し、系統的な調査・研究を進めた。
- b) 政治グループは、政治・経済・行政・社会・法律各分野の専門家で陳情に関心を持つ中堅・

若い研究者をメンバーとする「総合研究－陳情」研究会を三カ月に一回開催した。また本年度末に「日中関係の源流を探る－1970年代の再検証」を「新しい日中関係を考える研究者の会」などと協力して開催した。

- c) 経済グループは、中国から周黎安氏、秦暉氏の参加を得て、国際ワークショップ「毛沢東時代の経済制度と政策の評価」を開催し、1950年代中国の経済政策について検討した。
- d) 国際関係・文化グループは、「1950年代政治」「汪精衛文書」「図画像資料」の3セッションに分かれ、四半期に一度程度の研究会を開催した。

(3) 現代イスラーム研究班

「現代イスラームの超域的基礎研究

－議会主義の展開と立憲体制に関する一次資料の収集と比較分析研究－

世界の近現代イスラーム研究において、これまでほとんど用いられることのなかった中東諸国の議会文書(アラビア語、ペルシア語、トルコ語)を収集・整理・分析し、それぞれの地域(国家)に誕生した議会主義の政治思想と立憲体制の実態を比較・検討する。2009年度からは、新たに中央アジア諸国を比較の対象に加え、基本資料の収集と整理・分析を行う。これによって中東・中央アジアなどのイスラーム地域における国民国家の歴史的役割と今日的意義を一次資料にもとづいて総合的に考察する。他方、イスラーム関係資料の収集と整理、データベース化を推進し、日本における資料センターとしての充実をはかる。

[研究実施概要]

現代イスラーム研究班の活動は、資料の性格に対応してアラブ、イラン、トルコ、中央アジアの4グループに分かれて実行され、2009年度以来進めてきた議会文書研究の成果として、『全訳イラン・エジプト・トルコ議会内規』を刊行した。また、年度末には合同研究会を開き、次年度以降の研究計画と2014年度に予定されている国際シンポジウムについて検討した。

B. アジア諸地域研究

1. 東アジア研究部門

(1) 前近代中国研究班

①「古代地域史研究－『水経注』の分析から－(2)」

本研究班では地域史という視点から、中国古代の地域社会の構造を検討してきた。その基礎となるのは『水経注』(原典6世紀、中国最古の地理書)とその諸注の再検討である。これを注文、疏文まで精読し、加えて考古学上の諸発掘成果およびランドサット衛星地図などと合わせて分析するという歴史地理学的方法による研究に挑んでいる。また流域の古代遺跡と『水経注』記載の内容を合わせて検討することで、歴史的な自然環境・社会的実態を具体的に理解し、流域の地域社会の構造の変化を明らかにしていく。刊行を予定している『水経注疏訳注』洛水・伊水篇訳注もこれらの成果を反映させたい。渭水下流域及び洛水・伊水流域は「黄河文明」の中心地である。ここを「地域史」という観点から分析することは中国古代史研究においては新鮮な視点であり、『水経注』の研究という範疇を超えて、内外における中国古代史研究の新たな展開となる研究を目指している。

[研究実施概要]

- a) 陳橋驛復校『水経注疏』(江蘇古籍出版社刊)をテキストとし、洛水・伊水篇(巻15)の講読を隔週の研究会において実施した。洛水は陝西省東南部に発して東北流して河南省洛陽を経、偃師県において河南省内を東北流してきた伊水を合わせた後、同省鞏県東北の洛口において黄河に入る。すでに公刊された渭水篇訳注上・下巻に続いて、洛水・伊水篇訳注の刊行をめざしている。
- b) 『水経注』洛水・伊水篇訳注を刊行するため、洛水・伊水流域の地誌的記述及び考古学的調査・発掘報告の収集を実施している。2013年12月25日から2013年12月29日の間、洛水・伊水とそれらに流入する小河川の河道を調査した。同時に、それらの河川沿岸の史

跡を調査し、洛水と伊水の合流点、黄河と洛水の合流点を検分した。
c) 『張家山漢簡「二年律令」の研究』を刊行した。

②「中国社会経済史用語解集成の作成とその電子辞典化」

本グループがこれまでに作成・公刊した『宋史食貨志訳註(一)～(六)』(東洋文庫刊、1960年～2006年)、および『宋会要輯稿・食貨篇・社会経済用語集成』(東洋文庫刊・2008年)における訳註および用語の収集の成果をベースとして、整理と増補を加え、広範囲かつ多方面の利用者の便宜に適合するような冊子体およびCD-ROMの用語解説集を作成し、研究活動のいっそうの発展に資するプロジェクトである。

[研究実施概要]

2011年度に刊行した『中国社会経済史用語解』をもとに、今回の編集において収録するに至らなかった司法史関係用語等の原稿について検討し、2014年度以降における修訂版のための準備作業を行った。

③「東アジア都城の考古学的調査・研究(3)」

本研究班では、渤海を中心として東アジアにおける都城の比較研究を行ない、その研究成果として2004年度に『東アジアの都城と渤海』(全394頁)を、2006年度に『渤海都城の考古学的研究Ⅱ』を公刊した。2011年には上京龍泉府の踏査、2012年には上京龍泉府、虹鱒漁場墓地遺跡、三靈屯遺跡等の中国所在の渤海遺跡を踏査、資料収集を行った。現在、中国では上京龍泉府、西古城、八連城など都城及び古城跡の調査が進行し、それら遺跡の報告書も刊行され、渤海遺跡に関する資料が増大した。そのため、これら遺跡資料の机上における整理と調査・研究が重要となっており、現地における調査とともに継続していくことが今後の活動の中心となる。

[研究実施概要]

上京龍泉府、西古城、虹鱒漁場墓地遺跡ほか中国で出版された渤海遺跡の発掘調査報告書の精査、検討を行った。また、朝鮮半島における百濟、新羅の都城に関する最新の情報を収集し、それらの整理、検討を行った。

④「前近代中国民事法令の変遷」

宋代以降の戸婚・田土・錢穀などを扱う「民事」法令を分析し、どのように変遷してきたかを明らかにする。中国の各時代の様々な法についての研究の中でも、近20年の特徴のひとつとして、法令の有効性、厳格性などを版牘文や契約文書によって検討する研究がなされてきたことがあげられる。契約文書や多くの条例、版牘文などが発見され、また中国国内にあるものが利用しやすくなったことにもよろう。本研究班も過去5年間、この方向で研究活動をしてきた。この5年間の研究をとおして、あらためて法令そのものに視点をあてる必要があることに到った。民事的な法令に限ったのは、社会状況を反映しやすく、社会の実態の変化を分析するに適していると見ているためである。一度できた法は常に現実社会に適合しにくくなってゆくと、時代を通して考察することにより、漢族社会の大きな変容をつかむことができると考える。

[研究実施概要]

a) 2012年度に引き続き、宋～清の条例の収集を進めた。

b) 収集した条例の整理、解説を行うべく定期的に研究会(メンバー以外の研究者も含める)を開き、その研究成果として2013年2月に『中国近世の規範と秩序』を刊行した。

(2)近代中国研究班

「20世紀前半日本の中国調査」

本研究は、1910年代から40年代前半に日本の諸研究調査機関が中国で実施した調査活動に関する資料収集とその分析を行うもので、その重点は華北におくが、地域的特質を検討するために華中南を含め、日本側および中国側の資料の活用について新たな視点から再整理をはかり、20世紀前半期の中国社会の全体像を考察する。2012年度に引き続き、「華北」認識の問題を中

心テーマとする。

[研究実施概要]

- a) 研究成果として『華北の発見』(東洋文庫論叢76)を刊行した。その成果の一部は、2013年度秋期東洋学講座で「戦前戦中期の調査資料から見る日本人の中国認識」として発表した。
- b) 日本及び中国における資料調査・収集を引き続きおこなった。
- c) 『近代中国研究彙報』第36号を刊行した。
- d) 次年度以降の研究体制の確立のために、旧近代中国委員会及び近中班の過去の研究活動を整理し研究会で検討した。さらに次年度以降に、華中および華南を研究対象とするため、当該地域の研究者を招聘し、研究状況を検討した。
- e) 科学研究費補助金基盤研究(A)「近現代中国農村における環境ガバナンスと伝統社会に関する史的研究」グループと共催で、2013年12月に公開シンポジウム「近現代中国農村と村落档案史料」を、2014年2月に研究会を開催した。

(3) 東北アジア研究班

①「日本所在近世朝鮮文献資料研究(2)」

当班では2004年度以来、京都大学附属図書館や天理大学附属天理図書館今西文庫をはじめ、日本国内の各機関・個人が所蔵している近世朝鮮の記録類の調査を進めてきた。本課題はそれをさらに継続し、第2次調査をおこなうことにより、解題目録の完成を期すことをめざす。すでに近世朝鮮の古典籍類(いわゆる「朝鮮本」)については総合的な調査が進められ、その全貌がある程度解明されているが、これに対し地方官庁や民間で作成され、「成冊」などと呼ばれる帳簿類をはじめとする各種の記録類については、これまで全体的な調査がなされることがほとんどなかった。2004年度からの第1次調査では、もはや現地では所在が確認されていない資料を発見し、その内容分析をおこなうなどの成果もあげており、第1次調査と今回の第2次調査によって、日本における当該資料類の悉皆的な調査をほぼ達成できるものと見込まれる。

[研究実施概要]

前年度に引き続き、東京大学総合図書館、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所等において、当該機関が所蔵する近世朝鮮の記録類の調査および目録作成作業を実施した。上記調査の結果を整理し、『日本所在近世朝鮮記録類解題Ⅱ』刊行のための準備を進めた。

②「清朝満洲語檔案資料の総合的研究(2)」

清代の第一公用語である満洲語は、清初ばかりでなく、清朝一代にわたって用いられた言語である。18世紀の乾隆帝代より、京師に暮らす旗人たちは、日常語として漢語をもちいるようになっていったが、文章用語としての満洲語は、民国にいたるまで継続して利用された。現在、北京・中国第一歴史檔案館には、約1千万件の文書資料が保存されているが、そのかなりの部分は、満洲語(または漢語とのいわゆる合璧)によって記されたものである。このことは、清代の文書伝達体系全体において、満洲語の利用が不可欠であったことを示している。とくに入関前(1644年以前)および清初の時期の文書・書籍、ならびに旗人、藩部をはじめとする辺境地方、そして対外関係等の文書において、多くの場合満洲語が用いられている。本研究は、これら満洲語で記された、または場合によっては印刷された清代の文献資料について、清初期を中心として総合的に検討を加えようとするものである。

[研究実施概要]

清初の「内国史院」関係文献と『鑲紅旗満州衙門檔案』の研究を実施した。2012年度に出版した『内国史院檔 天聰五年Ⅱ』に続き、太宗崇徳年間分の檔案研究を行うとともに『鑲紅旗檔』研究編(TBRL: *The Bordered Red Banner Archives in the Toyo Bunko*)の編集作業を継続してすすめた。

③「清代東アジア・北アジア諸領域の歴史的構造分析(2)」

中国ではこの数年にみられる内外政治・経済・民族を中心とする国家事業が急進するなか、長期間に亘って内在していた政治・経済・民族・文化問題が表面化している。チベットやウイグルをめぐる自治区の問題はその端的な事例であり、その影響は広く中央アジア・北アジア領域世界にも及んでいる。そこには、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を進展させた清朝の最大版図が直接に現代中国と繋がるなか、その一体化から生じた政治・経済・民族・文化の問題も現代中国に直結していた反映と捉えられる特徴が多々窺える。新たに用いられ始めている「中華民族」の呼称はその顕著な例として捉えうる。本研究班では、中国内地の諸領域世界とその周辺に連なる諸領域世界との一体化を独自に進展させた清朝の国家領域構造と対外関係の問題を総合的に研究・分析してきた。刊行予定の英文論文集にこれまでの成果を反映させると共に、引き続き清代東アジア・北アジア諸領域における歴史的構造の全容を総合的に捉える研究体制を構築するべく、清朝の国家領域構造と対外関係を分析する上で不可欠な檔案(公文書)類のうち、保存収蔵状況が未詳な檔案類を中心に体系的に蒐集、整理、デジタル化し、向後の研究に貢献することを目的とする。

[研究実施概要]

- a) TBRL: *The Historical Structures of Eastern and Northern Asia in the Qing Dynasty Era*. [仮題]の編集作業を継続して行なった。
- b) 前年度に引き続き、清朝政治史、清代中国社会経済史、清代中国近代政治史、清代モンゴル・露清関係史、清代中国西南民族史の各専門研究領域をもとに、既成の領域世界・時代区分の枠を越えて海外における図書館・檔案館・研究機関などに所蔵されている檔案文献史料類の史料調査・現地調査を実施し、旧来のマイクロ=フィルム方式や新たなデジタル化方式による蒐集・整理・分析作業を行うと共に、中国で新たに影印されている大部の檔案文献史料類の蒐集することを試みた。ただ、近年における日中関係の悪化が影響し、従来進めてきた中国における資料調査ならびに現地調査の事前調整が暗礁に乗り上げた状態のままにあり、その解決方法を模索する状況におかれている。
- c) 上記の文献史料類について、目録作成を進めると共に、デジタル化によって幅広い利用ができるようにするための基礎準備を行なった。同時にまたこれらの新規蒐集史料と東洋文庫収蔵の文献資料類とを活用し、研究会などの開催を通して、上記の課題に関する研究を推進し、その研究成果を個別論文・論文集・史料集などの形で公開する計画については、日中関係の悪化を背景とする諸般の事情から先送りすることとし、かわって、東洋文庫所蔵の祭祀儀礼資料類を総合分析することによって、従来みられた清朝の国家支配構造をめぐる研究アプローチとは全く異なる、デジタル手法の導入による資料検証ならびに清朝宮廷儀礼の復元作業を、新たな長期研究課題として設定し、その基礎作業の一部を公開した。

(4) 日本研究班

「岩崎文庫貴重書の書誌的研究(2)」

東洋文庫所蔵の岩崎文庫には日本の文化・文学・言語を研究する上で重要な典籍が数多く所蔵されているが、その書誌的調査は未だ十分にはなされていない。2006年度までに室町時代以前に成立した古写本・古版本についての書誌解題(I~V)を公刊したことを受けて、ひき続き近世の成立ないしは刊行の貴重書を調査して研究の基盤を整備するとともに、その成果を広く公開することをめざしている。

[研究実施概要]

2012年度刊行の『岩崎文庫貴重書書誌解題Ⅶ』に引き続き、Ⅷ輯刊行の準備として、岩崎文庫の近世初期絵入り本について書誌調査を行った。

2. 内陸アジア研究部門

(1) 中央アジア研究班

①「サンクトペテルブルグ所蔵古文献の研究－ウイグル文を中心として－」

東洋文庫が入手したサンクトペテルブルグの東洋学研究所のマイクロフィルムのうち、ウイグル語とソグド語については『東洋文庫所蔵St.Petersburgウイグル文字・ソグド文字・マニ文字写本マイクロフィルム仮目録[第1稿]』として、初期の現地での実見データの一部を取り込んだフィルム番号整理一覧を、2002年に刊行した。その後、マイクロフィルムのデータを昨年までのプロジェクトでデジタル整理を続けた。ほぼ完成に至った目録の改訂版を原稿とし、冊子かデジタルデータの形で編集し直して刊行することは、内外研究者の要望に沿うことになる。ただし、東洋文庫と東洋学研究所の初期の契約の制約があるため、その刊行方法については慎重に検討をおこなうものとした。ついては、ウェブ上に未公開のものを含む大英図書館蔵のウイグル文字文献の一覧表などと合わせて刊行する可能性も検討したい。その中から、文書研究の成果についての論文をこれに付すこととする。

[研究実施概要]

前年度に引き続き、以下の研究を実施した。

- 上記目録改訂版の増補をベースとして文献研究を進めた。
- 古ウイグル文を中心とする古文献の研究文献一覧を増補し、また写本断片の内容に関する補綴を進めた。
- 漢文との合璧ないし表裏別記の文献を中心として、2-(1)-③「漢語文献」グループとの協同研究を進め、写本断片の合併に関するデータを集積した。
- 以上をふまえて、「サンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵ウイグル古文献目録(増補版)」の原稿作成にめどをつけた。

②「近現代中央ユーラシアにおけるイスラームと政治権力」

ソ連解体(1991年)以後、中央ユーラシア近現代史研究は、大きく可能性が開かれた。これまでアクセスが不可能であった多種多様な史料が公開され、また現地の研究者との共同研究や外国人研究者による現地調査も可能になったことは、決定的な意味をもっている。こうした中で、本研究は次の2点を課題とする。

第一に、8世紀以降の中央アジア史を考えると、その政治と社会、文化においてイスラームが果たした役割を無視することはできないが、ソ連時代は無神論イデオロギーのためにイスラームに関わる諸問題は不当に軽視されてきた。いま新たな中央アジア史を再構成しようとするならば、この点を克服することが不可欠である。

第二に、ペレストロイカ以降、中央ユーラシア地域においてはイスラームの復興が顕著であり、イスラーム国家の樹立を目標とする急進派は、世俗主義を掲げる政権との間に鋭い緊張関係を作り出している。このような現代のイスラーム復興主義は、中央ユーラシア史の文脈においてどのように考えるべきだろうか。それには、近現代史におけるイスラームと政治権力との相互関係を実証的に検討することが不可欠である。

[研究実施概要]

- 引き続き海外における史料収集を行った。タシュケント(ウズベキスタン)、カザン、サンクトペテルブルク(ロシア)などの図書館や研究機関のほか、各地の民間に所蔵されている史料の収集を現地の研究者や所蔵者の協力を得て行った。
- a)の史料のうち、とくに定期刊行物についてはデジタル化によって幅広い利用ができるようにし、文書史料については目録作成を進めた。
- 新規収集史料と東洋文庫の蓄積してきた豊富な文献資料とを活用し、研究会の開催などを通して、上記の課題に関する研究を推進した。たとえば、2013年10月11日にはIlya Zaytsev氏(北海道大学スラブ研究センター特任外国人教員/ロシア科学アカデミー東洋学研究所)を迎えて研究会を開催し、“Russian” Islam in the Eighteenth Century: Historical Review on the Adoption of Islam by “Ethnic” Russians と題する報告を受けて討論を行った。

③「サンクトペテルブルグ東洋学研究所所蔵内陸アジア出土漢語文献マイクロフィルム目録のデータベース化」

2002年に東洋文庫が世界にさががけて入手した東洋学研究所の内陸アジア出土文書マイクロフィルム(全363リール、約25万齣)には、4、5世紀から15世紀に及ぶコータン・サカ語、西夏語、チベット語、ウイグル・ソグド語、漢語、チャガタイ・トルコ語、サンスクリット語、アラビア語、ペルシア語、満洲語、モンゴル語の11言語の文書が含まれている。このフィルム資料の目録をデータベース化してそれを公開することは、わが国だけでなく、諸外国の研究機関・研究者の希求するところ切なるものがある。

本研究は、上記フィルムの中からとくに漢語文献を抽出してそのフィルム目録のデータ化を図るとともに内陸アジア出土漢語文献の特性を明らかにすることを目的とする。

[研究実施概要]

- a) 敦煌出土文献Reels256～363のうち、漢語文献のある40リール(266～277、279～286、292、334～337、349～363)についてリールに付された各文献整理番号とその齣数とを対照させた仮目録を作成し、文庫の閲覧に供するべく各文書に付された文献番号の「索引」作りを進めた。
- b) 上記文献中、『俄蔵敦煌文献』(上海古籍出版社、1993)で未収録とされる漢語文献約700件について、前年度に引き続き内容を検討した。その中の20件については録文を作成し出典を確定することができた。
- c) サンクトペテルブルク所蔵ウイグル・ソグド文字文献全31リールのうち、21リールに含まれる漢語文献約1100件余りについて、文献番号とそのmicrofilm齣数とを対照した「仮目録」を作成するとともに、できる限りその録文と出典を示した目録の作成に着手した。
- d) 本研究班における研究成果として、2014年度には『敦煌・吐魯番出土漢語文献の様式・特性の研究』(仮)の出版を計画している。そのために、前年度に引き続き定期的に「内陸アジア出土古文献研究会」を行うとともに、「8－11世紀内陸アジア出土漢語文書輪読会」を開催した。

(2)チベット研究班

「チベット蔵外文献の書誌的研究(2)」

チベット研究班においては、新たに発見された写本を中心とするチベット語資料を収集・保管し、歴史・文化・宗教の各分野にわたるチベット語文献の体系的網羅的なコレクションの充実をはかることを目的とする。収集した資料については目録化を行い、データベースとして公開すると同時に、敦煌チベット語文献、河口慧海将来文献などとともに東洋文庫所蔵チベット語蔵外文献として写本校訂と訳注研究を行い、データベースあるいはシリーズ刊行物として公開する。以上の3点により、世界的なチベット学の研究拠点として高い貢献を目指すものである。

[研究実施概要]

- a) 資料収集:近年中国で新たに発見された10～13世紀のチベット語写本の影印版の収集、チベット語大蔵経文献、蔵外文献の電子版を購入し、コレクションの体系的な充実をはかった。
- b) a)によって収集した資料の分析と目録作成を行った。
- c) チベット人研究協力者の協力のもとに、次の研究を行った。
 - ① 筆記体写本の校訂:古いチベット語写本の多くは手書きの筆記体で書かれており、一般研究者には解読が難しいものがある。それらをチベット人協力者の指導を得て校訂し、活字体テキストデータベースを作成した。
 - ② ①のデータベースをもとに文献の分析・研究を進めた。
- d) 『西蔵仏教宗義研究 第10巻 トウカン「一切宗義」ボン教の章』を刊行した。

3. インド・東南アジア研究部門

(1) インド研究班

「インド刻文史料の蒐集と研究」

インド(南アジア)の刻文研究は、これまでわが国でごく僅かな研究者しかいなかったが、近年、ドラヴィダ系言語について石川寛、太田信宏、アーリヤ系言語について三田昌彦、古井龍介といった若手研究者が育ってきた。刻文は、「史書なきインド」の古代・中世史研究における根本史料であるにもかかわらず、そのようなこれまでの状況から、わが国においては、テキストおよび研究書の蒐集が充分とは云えない。

他方、インド自体での刻文研究は、テキストの出版が遅れていることと、若手研究者が育たないことによって、危機的な状況にあるとさえ云いうる。また、世界的にも、インド刻文の研究者数は、極めて少ない。

そのような状況に鑑み、わが国の研究機関において、未出版のものをも含めてインドの刻文史料を蒐集し、それを国際的に公開しながら、わが国の新しい研究者の力を結集して、インド古代史・中世史の研究進展を図ることは、わが国のインド研究に課せられた急務と云えよう。

〔研究実施概要〕

- a) 東洋文庫に所蔵のない刻文資料、とくに、インド独立後の各州政府考古学局刊行の資料を購入し、未出版の刻文テキストは、マイソールのインド考古学局刻文部でコピーして蒐集する計画を立てていたが、2013年度は、年度末に東南アジア研究班と共同で、国際シンポジウムを行うことになったので、インドでの蒐集活動は行わず、その準備に集中した。
- b) 上記国際シンポジウム”State Formation and Social Integration in Pre-modern South and Southeast Asia” (The Second International Symposium of Inter-Asia Research Networks) については準備を周到に進め、2014年3月8日(土)・9日(日)に開催した。インド人研究者他6名の外国人研究者に参加してもらい、活発な議論を行った。総括の辛島はコーディネーターを務め、研究員もそれぞれに基調報告やセッションの司会を務め、大変有意義なシンポジウムを行うことが出来た。
- c) 上記シンポジウムの報告集と *Report on Indian Epigraphical Studies: The Toyo Bunko* の刊行に関し、2014年度にむけて準備を進めた。

(2) 東南アジア研究班

「近現代東南アジアに関する史料研究」

近代日本と東南アジアは、明治期の後半から緊密な関係を有し始め、第二次世界大戦期に日本は東南アジアを軍事占領した。また戦後日本は、東南アジアと緊密な経済関係を形成するに至っている。こうしたなかで日本の東南アジア研究も、この40年間に飛躍的な研究の発展をとげた。ただし日本の東南アジア研究は、第二次世界大戦後にいきなり始まったわけではない。すでに大正期より東洋史の東西交渉史の一分野として南洋史が注目を浴び、また南洋ブームの高まりとともに経済関係の文献も出版されていた。そして第二次世界大戦期には、翻訳本も含め多数の東南アジア関係の文献が出版された。これらの文献は、一部の実証研究を除いて、学術的にあまり注目を浴びてこなかった。しかしそれらは、日本の東南アジア観を検討するためのみならず、東南アジア社会を考察する上においても、重要な資料となりうる。本研究は、従来力点が置かれた日本の東南アジア関与という観点からのみならず、当時の東南アジアの社会統合に果たした日本人の役割の視点からその記述を検討し、日本人をはじめ中国人やインド人さらにはアラブ人や欧米人など多様な人々が居住した近代東南アジア社会の特質について研究する。

〔研究実施概要〕

- a) 近代東南アジアの都市の社会統合に果たす日本人の役割に関する文献資料の収集と整理を行なった。合わせて、第二次世界大戦後に出版された戦前・戦中期の日本の東南アジア関係の文献の目録作成作業を進めた。
- b) オランダで史料調査を行い、植民地期インドネシアの主要都市における日本人を含む外来系住民の社会統合に果たす役割を検討した。
- c) インド研究班と合同で、”State Formation and Social Integration in Pre-modern South and

Southeast Asia” (The Second International Symposium of Inter-Asia Research Networks) を開催し、国内外の研究者との交流を推進した。

4. 西アジア研究部門

西アジア研究班

「イスラーム世界における契約文書の研究(2)」

ワクフ(宗教的寄進)は、都市や農村の宗教施設を建設するだけでなく、経済基盤となり、政治権力者、名士、民衆の結びつきをつくった。ワクフに関わる、法学書、年代記、地理書などの叙述史料とワクフ寄進文書や調査台帳などの文書史料を収集し、諸地域における実態と歴史の変容を解明する。

[研究実施概要]

- a) 第一期からの継続課題であるヴェラム文書(モロッコの皮紙契約文書、東洋文庫所蔵)について、文書解読のための研究会を月例で開催し、文書のアラビア語テキストの校訂を行い、モロッコやライデン大学(オランダ)において関連資料の収集や調査を行った。
- b) ワクフ文書の総合的研究にむけ、国内外で研究会を開催し、研究者ネットワークを築いた。
- c) 『イマーム・レザー廟ワクフ文書集』(TBRL、ペルシア語)の校訂と研究を進めた。

C. 資料研究

資料研究部門

東アジア資料研究班

「東アジア資料の研究」

中国、台湾、香港、東南アジア華人社会などに所蔵される文献資料の探索、各国図書館との国際的情報交換・資料交換・人的交流を目指す。

[研究実施概要]

- a) 「中国祭祀演劇関係写真資料データベース」を作成し東洋文庫ホームページにおいて公開した。
- b) 台湾中央研究院、上海図書館、中国社会科学院図書館等との研究交流と資料交換を推進した。

D. 各種研究会・講演会開催

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
研究会数	10	11	19	11	4	11	5	4	5
参加人数	219	108	302	182	70	143	73	24	69

1月	2月	3月	計
2	3	8	93
27	52	183	1452

II. 資料収集・整理

A. 資料購入

超域アジア研究、アジア諸地域研究、資料研究において必要とされる一次資料を中心に購入を進めた。購入冊数は別添資料の通りである。

区 分	和漢書	洋 書	その他
総合アジア圏域研究	4冊	4冊	0件
超域・現代中国研究	140冊	0冊	0件
超域・現代イスラーム研究	0冊	655冊	0件
東アジア研究	395冊	4冊	0件
内陸アジア研究	37冊	46冊	4件
インド・東南アジア研究	1冊	106冊	27件
西アジア研究	0冊	462冊	0件
共通(継続・大型資料)	1315冊	275冊	0件
合 計	1892冊	1552冊	31件

B. 資料交換

国内外各提携機関との間で資料交換を進めた。

区 分	受 贈				寄 贈		
	和漢書	洋 書	その他	計	和漢書	洋 書	計
単行本	3,498冊	348冊	78冊	3,924冊	0冊	0冊	0冊
定期刊行物	1,848冊	583冊	—	2,431冊	2,084冊	0冊	2,084冊
計	5,346冊	931冊	78冊	6,355冊	2,084冊	0冊	2,084冊

C. 資料保存整理

2013年4月1日～2014年3月31日までの期間における、保存整理作業は、下記の通りである。

・マイクロフィルム劣化防止作業 445件

III. 研究資料出版

A. 定期出版物刊行

- 『東洋文庫和文紀要』(東洋学報) 第95巻第1～4号 A5判 4冊(刊行済)
- 『東洋文庫欧文紀要』(*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*) No.71 B5判 1冊(刊行済)
- 『近代中国研究彙報』 第36号 A5判 1冊(刊行済)

- | | | | |
|---|------|-----|---------|
| 4.『東洋文庫書報』 | 第45号 | A5判 | 1冊(刊行済) |
| 5.『新たなアジア研究に向けて／ <i>Modern Asian Studies Review</i> 』 | 第10号 | A4判 | 1冊(刊行済) |
| 6. <i>Asian Research Trends New Series</i> | No.8 | A5判 | 1冊(刊行済) |

B. 論叢等出版

- | | | |
|-----------------------------------|-----|---------|
| 1.『華北の発見』東洋文庫論叢76 | A5判 | 1冊(刊行済) |
| 2.『中国近世の規範と秩序』 | A5判 | 1冊(刊行済) |
| 3.『張家山漢簡「二年律令」の研究』東洋文庫論叢77 | A5判 | 1冊(刊行済) |
| 4.『西藏仏教宗義研究 第10巻 トウカン「一切宗義」ボン教の章』 | B5判 | 1冊(刊行済) |
| 5.『全訳 イラン・エジプト・トルコ議会内規』 | A5判 | 1冊(刊行済) |

IV. 普及活動

A. 研究情報普及

1. 東洋学講座

(春 期) 共通テーマ「東洋文庫と本の世界Ⅲ」

第 535 回 2013 年 6 月 17 日(月)

「ラッフルズと海の東南アジアの“近代”」

東洋文庫研究員

立教大学非常勤講師

坪井 祐司 氏

第 536 回 2013 年 6 月 28 日(金)

「軒瓦文様の伝播—唐から東へ—」

東洋文庫研究員

青山学院大学教授

清水 信行 氏

第 537 回 2013 年 7 月 4 日(木)

「最近の韓流歴史ドラマと韓国の歴史認識 —史料と史実のあいだ—」

東洋文庫研究員

放送大学副学長

吉田 光男 氏

(秋 期) 共通テーマ「東洋文庫と本の世界Ⅳ」

第 538 回 2013 年 11 月 29 日(金)

「長城のまもりー 勞 と居延漢簡ー」

東洋文庫研究員

初山 明 氏

第 539 回 2013 年 12 月 6 日(金)

「東洋文庫所蔵の奈良絵本・絵巻について」

慶應義塾大学教授

石川 透 氏

第 540 回 2013 年 12 月 13 日(金)

「戦前戦中期の調査資料から見る日本人の中国認識」

東洋文庫研究員

宇都宮大学名誉教授

内山 雅生 氏

2. 特別講演会

6月13日(木)

“有法無天？ 20世紀中國法律文化的天演化及多重性格” [英語、中国語・通訳なし]

香港科技大学人文学講座教授

蘇 基朗 氏

11月21日(木)

「“經濟革命”ー宋代中国とイギリス」 [英語・通訳あり]

台湾淡江大学経済学系

Dr. Ronald A. Edwards

12月24日(火)

公開シンポジウム「近現代中国農村と村落檔案史料」 [中国語・通訳なし]

東洋文庫研究員

内山 雅生 氏 ほか

2月10日(月)

国際シンポジウム「毛沢東時代の經濟制度と政策の評価」 [中国語・通訳なし]

東洋文庫研究員

中兼和津次 氏 ほか

2月23日(日)

「近代華北集市(鎮)研究述評」

天津社会科学院歴史研究所教授

張 利民 氏

「民国年間冀中農村教育研究」

天津師範大学歴史学院教授

侯 建新 氏

「労働與礼俗:女性主導下的上海社会關係建構」

華東師範大学社会發展学院教授

張 文明 氏

[中国語・通訳なし]

3. 公開講座

〈マリー・アントワネットと東洋の貴婦人ーキリスト教文化をつうじた東西の出会いー〉

6月8日(土)

「キリシタン時代における良心問題の事例集について~ヨーロッパ版とキリシタン版」

慶應義塾大学教授

浅見 雅一 氏

「キリシタン時代の挿絵教理書にみる東西交流の痕跡」

上智大学教授、同キリシタン文庫長

川村 信三 氏

7月6日(土)

「島原天草一揆と「切支丹」の記憶」

早稲田大学教授

大橋 幸泰 氏

「日本のキリシタン墓碑～全国調査から見えてきた墓碑の様相とその課題」

長崎歴史文化博物館研究員

大石 一久 氏

7月7日(日)

「パリ外国宣教会とキリシタンの宗教画」

東京大学助教

岡美 穂子 氏

「細川ガラシャと同時代を生きたイタリア女性たち

～天正遣欧使節が出会った人、出会わなかった人」

学習院女子大学教授

根占 献一 氏

7月20日(土)

「キリシタン史の背景を考える～カラヴァッジョから平田篤胤まで」

フランス極東学院東京支部代表

彌永 信美 氏

「キリシタン大名の改宗と処世について」

東京大学名誉教授

五野井隆史 氏

7月28日(日)

「私の細川ガラシャ～花も花なれ人も人なれ」

細川護熙元内閣総理大臣夫人、公益財団法人スペシャルオリンピックス日本名誉会長、
認定NPO法人世界の子どもにワクチンを日本委員会理事長

細川佳代子 氏

細川ガラシャのオペラ『気丈な貴婦人－Mulier Fortis』および

『サクラメント提要』の一部演奏・歌唱

東京藝術大学准教授

大塚 直哉 氏(演奏)

東京藝術大学准教授

野々下由香里 氏(歌唱)

9月28日(土)・29日(日)・30日(月)

アジア資料学研究シリーズ

「西洋古典籍書誌講習会－西洋書籍と東洋研究－」

フランス国立極東学院東京支部代表

彌永 信美 氏

東京大学名誉教授・印刷博物館館長

樺山 紘一 氏

東洋文庫研究員・東京大学大学院准教授

高橋 英海 氏

東洋文庫研究員・京都大学人文科学研究所准教授

村上 衛 氏

神戸大学大学院教授

塚原 東吾 氏

東洋文庫研究部長

濱下 武志 氏

東京藝術大学大学院教授

稲葉 政満 氏

龍谷大学名誉教授

江南 和幸 氏

東洋文庫研究員・北海道大学名誉教授

石塚 晴通 氏

10月18日(金)・19日(土)

アジア資料学研究シリーズ

「東洋のCodicology II－文理融合型東洋写本・版本学(講習会)－」

東洋文庫研究部長

濱下 武志 氏

東洋文庫研究員・北海道大学名誉教授

石塚 晴通 氏

信州大学准教授

白井 純 氏

上智大学教授

豊島 正之 氏

東洋文庫研究員・弘前大学教授

松井 大 氏

神戸市外国語大学客員研究員

岩尾 一史 氏

〈マルコポーロとシルクロード世界遺産の旅〉

10月26日(土)

「求法僧の西域行記とそのヨーロッパ語訳—人々を敦煌へ誘った書物たち」

京都大学人文科学研究所教授

高田 時雄 氏

10月27日(日)

「アンコール・ワットと『富貴真臘』」

—アンコール王朝の繁栄とパクス・アンコール(アンコールの平和)」

上智大学特任教授・元学長

石澤 良昭 氏

11月30日(土)

「暗殺者教団の神話—その歴史に見る「東洋学」の展開」

東京大学東洋文化研究所准教授

森本 一夫 氏

12月5日(木) 英国大使館・Japan400協賛『ザ・ブリティッシュ・デイ(The British Day)』記念

「日本におけるジョン・セーリス:400年後の今から振り返る」

東洋文庫普及展示部長、国立公文書館アジア歴史資料センター長

平野健一郎 氏

「John Saris とその時代」

杏林大学副学長

ポール・スノードン 氏

「ジョン・ダウランドからビートルズまで～英国音楽の魅力」

東京藝術大学副学長

澤和 樹 氏(演奏)

ほか東京藝術大学大学院在学学生4名(演奏)

3月8日(土)・9日(日) ≪総合アジア圏域研究国際シンポジウム≫(使用言語:英語)

State Formation and Social Integration in Pre-modern South and Southeast Asia:

A Comparative Study of Asian Society

Keynote Address:

KARASHIMA Noboru (Research Fellow, Toyo Bunko),

Session 1: The State and Society in the Islamic World (13th -16th Centuries)

Speaker:

Sunil KUMAR(Professor, Department of History, University of Delhi, India)

“Transitions in the Relationship between Political Elites and Sufis under the Delhi Sultanate”

HIROSUE Masashi (Research Fellow, Toyo Bunko)

“The Rise of Muslim Coastal States in North Sumatra”

NISHIO Kanji(Research Fellow, Toyo Bunko)

“Melaka: A Model of Malay Islamic States”

Phillip B. WAGONER(Professor of Art History and Archaeology, Wesleyan University, USA)

“Sanskritizing the Persian Cosmopolis: A Case Study from the Monetary History of the Deccan”

Commentator:

TANABE Akio(Professor, Graduate School of Asian and African Area Studies, Director, Center for the Study of Contemporary India, Kyoto University)

Session 2: Early Polity and Society as Revealed from Archaeological and Literary Evidence

Speaker:

YAMAGATA Mariko(Project Professor, Center for Cultural Resource Studies, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University)

“Construction of Linyi Citadels: The Rise of Early Polity in Vietnam”

Rajan GURUKKAL(Professor, Centre for Contemporary Studies, Indian Institute of Science, Bangalore, India)

“Antecedents of State (Polity) Formation in Early South India”

Session 3: Formation of State and Society during the Period of the 5th –14th Centuries

Speaker:

FURUI Ryosuke(Associate Professor, Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo)

“Variegated Adaptations: State Formation in Bengal from the 5th to the 7th Century”

NITTA Eiji(Professor, Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University)

“Formation of Cities and State of Dvaravati”

Pierre-Yves MANGUIN(Professor Emeritus, École Française d'Extrême-Orient (French School of Asian Studies), France)

“At the Origins of Srivijaya: The Emergence of State and Cities in Southeast Sumatra”

R. CHAMPAKALAKSHMI(Former Professor, Jawaharlal Nehru University, New Delhi, India)

“Ideology and the State under the Early Medieval Pallavas and Cholas: Puranic Religion and Bhakti”

MATSUURA Fumiaki(JSPS Research Fellow, Sophia University)

“Kingship and Social Integration in Angkor”

AOYAMA Toru(Professor, Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies)

“Social Integration in Majapahit as Seen in an Old Javanese Court Narrative”

MITA Masahiko(Research Fellow, Toyo Bunko)

“Sanskritized Imperialism and State Integration in Early Medieval North India (c.950-1200)”

Commentator:

Hermann KULKE(Professor Emeritus, Chair of Asian History, Department of History, University of Kiel, Germany)

Closing address:

HIROSUE Masashi

〈仏教－アジアをつなぐダイナミズム〉

3月23日(日)

チベット映画上映会『静かなるマニ石』 東洋文庫研究員

星 泉 氏

4. 普及展示企画

東洋文庫ミュージアムにおける展示企画について、展示テーマ、展示品の検討を重ねた。

5. 参考情報提供

『東洋文庫年報』 2012年度版

A5判 1冊(刊行済)

B. データベース公開

2013年4月1日～2014年3月31日までの期間における、東洋文庫の図書・資料のデータ(日本語・英語)に対するオンライン検索アクセス状況については、別添資料の通りである。

C. 海外交流

以前より研究協力協定を締結しているフランス極東学院、台湾中央研究院、ハーバード・エンチン図書館、ハーバード・エンチン財団、アレキサンドリア図書館、イラン議会図書館にくわえ、ロンドン大学東洋アフリカ学院(SOAS)と協力関係を結んだ。

また、3月8日(土)・9日(日)に《総合アジア圏域研究国際シンポジウム》として、“State Formation and Social Integration in Pre-modern South and Southeast Asia” (The Second International Symposium of Inter-Asia Research Networks) を開催した。

V. 学術情報提供

A. 図書・資料の閲覧(協力)サービス

数量/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
閲覧者人数	193人	203人	225人	206人	269人	195人
閲覧図書数	2,397冊	1,864冊	2,099冊	2,105冊	3,153冊	2,160冊
レファレンス数	52件	55件	61件	56件	72件	53件

10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
212人	239人	211人	164人	179人	200人	2,496人
1,818冊	3,403冊	3,012冊	3,123冊	2,416冊	2,786冊	30,336冊
57件	64件	57件	44件	48件	54件	673件

B. 研究資料複写サービス

(1) マイクロフィルム・紙焼写真

区分	申し込み件数
数量	125件

(2) 電子複写

区分	申し込み件数	焼付枚数
数量	1,039件	35,074件

C. 研究情報提供サービス

刊行物の全文データ公開を随時更新した。

D. 展示

一般多数の方々を対象とした東洋学の普及を図る手段として、「東洋文庫ミュージアム」を運営した。

1. 基本方針

このミュージアムでは、特に東洋学に興味を持たない一般の方々を主な対象とし(中学生程度の

歴史知識を前提)、これらの利用者に、ミュージアム見学を通して東洋学に興味を持つ機会を提供するものである。本ミュージアムは、東洋文庫の蔵書・史料を中心に種々の展示企画を組み立て、常に新たな発見と変化のある展示を心がけている。

2. 展示手法

広く一般の方々にミュージアム訪問の興味を喚起するため、①見学に適切な規模の展示内容とし、②展示の解説は日頃東洋学とは疎遠な利用者にも十分理解できる簡易なものとし、③デジタル技術等を取り入れた視聴覚的かつ斬新な展示で利用者の興味を引くことに努めた。

3. 施設

温度・湿度管理、窒素ガス消火設備運用により、展示図書・資料の保全に万全を期した。また、併設のギフト・ショップ、ミュージアム・カフェでは、東洋文庫の所蔵資料も紹介し、一般利用者に対してミュージアムの魅力を高め、東洋学普及の一翼を担う、ミュージアムの一体施設として運営した。

4. 展示スケジュール

常設展と企画展の組み合わせからなる展示スケジュールを立て、以下の展示を開催した。

- a) 常設展は国宝と浮世絵を中心に構成されており、保存と集客の観点から、毎月初めに展示資料の入れ替えを行った。
- b) 企画展は一年に3回の頻度で行っている。本年度は以下の企画展を実施した。
 - ①「マリー・アントワネットと東洋の貴婦人ーキリスト教文化をつうじた東西の出会いー」
(2013年3月20日～2013年7月28日)
 - ②「マルコポーロとシルクロード世界遺産の旅ー西洋生まれの東洋学ー」
(2013年8月7日～2013年12月26日)
 - ③「仏教ーアジアをつなぐダイナミズムー」(2014年1月11日～4月13日)
- c) 各企画展において展示図録を作成した。全ページカラーで画像を多用し、解説文も平易なものわかりやすいものに仕上げた。A5版でハンディなブックレットタイプである。
- d) 上記企画展会期中に公開講座(企画展示記念講座)を開催した。
IV.普及活動ー3.公開講座 を参照
- e) 公益財団法人日本医師会と共催で「幕末から明治初期の医学関係文書」と題し、東洋文庫 藤井尚久文庫を中心とした医学関連の貴重書特別展示会を開催した。
会期:2013年11月22日(金)～24日(日)
会場:東洋文庫2F講演室

5. ガイドツアー

ミュージアムへの来客サービス・集客戦略の一環として、館内ガイドツアーを実施し、好評を得た(開館期間は毎日15時に開催している)。

6. 学校連携

東京藝術大学との協力協定により、記念コンサートを何度かミュージアム内にて開催し、多数の来場者を得た。

7. 博物館連携

学習院大学史料館、公益財団法人永青文庫と三館連携展示「東洋学の歩いた道」を企画し、各館で共有のテーマに基づいた展示を実施した(東洋文庫は「マルコポーロとシルクロード世界遺産の旅ー西洋生まれの東洋学ー」を開催)。また、三館連携の記念シンポジウムを学習院大学百周年講堂にて開催した。

8. 入場者数

2013年4月1日～2014年3月31日における、ミュージアム総入場者数は以下のとおりである。

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
入場者数	1,612人	1,678人	1,696人	2,095人	879人	985人	1,109人

11月	12月	1月	2月	3月	計
1,924人	1,755人	858人	757人	1,332人	16,590人

E. 広報普及

東洋文庫所蔵の図書・史料の掲載・報道・放映等の依頼に適宜対応すると共に、ホームページを随時更新し、利便性を確保した。東洋学の若年層への普及を目指し、学校連携活動も行った。

1. 報道実績

ミュージアムに関しての報道実績の主なものを以下に挙げる(50音順)。

新聞：全国紙『朝日新聞』、『読売新聞』、『日本経済新聞』、『毎日新聞』など

雑誌：『マンスリー三菱』、『歴史読本』、『目の眼』、『東京人』、『BCCJ ACUMEN』など

テレビ：映画『図書館戦争』の公開イベントをミュージアムで開催し、各メディアで紹介された。

2. 『東洋見聞録』

東洋文庫の活動をご支援頂いている「名誉文庫員」、「友の会会員」、職員OBほか関係者をつなぐニュースレターとして発行・頒布した。

3. メールニュース

東洋文庫ミュージアムのメールニュースをメール会員向けに毎月発信している。

4. 近隣の中学・高校とのミュージアム・フリーパス連携

a) 2012年度より施行された小石川中等教育学校とのミュージアム・フリーパス連携を引き続き締結し、同校の新入生対象のオリエンテーション(見学会)などを開催した。

b) 村田女子中学校とミュージアム・フリーパス連携を締結し、全校生徒を対象とした見学会を開催した。

5. 東洋文庫アカデミア

東洋文庫研究員をはじめとする各分野の専門家が講師となり、所蔵資料やこれまでの研究成果などの専門知識をわかりやすく教授する市民むけ講座を下記のとおり実施した。

講座名	講師(所属)	期間	人数
探検！書物の森	會谷佳光(東洋文庫)・牧野元紀(東洋文庫)	4/9	2
漢文入門	會谷佳光	4/11-6/6	4
探検！書物の森	會谷佳光・牧野元紀	5/7	2
初心者のための漢詩講座・作詩法	伊藤忠綱(二松学舎大学非常勤講師)	5/8-7/10	2
トルコ語の世界(初級編)	齋藤久美子(慶應義塾大学非常勤講師)	5/8-7/10	3
探検！書物の森	會谷佳光・牧野元紀	7/2	5

中国鉄道史入門	佐野実(国立公文書館アジア歴史資料センター調査員)	7/5-8/9	3
イスラーム美術写本挿絵入門	青木節子(トルコ細密画専門家)	7/8-9/23	3
江戸の書物	清水信子(北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部客員研究員)	7/11-8/15	7
原書で読む『イエズス会士書簡集』	牧野元紀	7/9-7/23	4
チベット仏教の世界	吉水千鶴子(東洋文庫研究員・筑波大学教授)・西沢史仁(東京大学研究員)	9/4-9/18	11
丸の内の原風景	佐久間健(国立公文書館アジア歴史資料センター研究員)	9/7-9/21	7
ドリュール	中村美奈子(Les fragments de M)	9/7-9/21	8
チベット民族の20世紀(その1)	小林亮介(筑波大学非常勤講師)	9/25-10/9	9
トルコ語の世界(中級編)	齋藤久美子	10/2-12/18	3
ペルシア語書道に親しむ	角田ひさ子(拓殖大学語学研究所講師)	10/5-12/21	7
探検! 書物の森	會谷佳光・岡崎礼奈(東洋文庫)	10/8	4
チベット民族の20世紀(その2)	大川謙作(東京大学学術研究員)	10/16-10/30	6
G.E.モリソンと東洋文庫(I)	濱下武志(東洋文庫研究部長)	10/17-10/31	9
イスラーム美術写本挿絵入門	青木節子	1/13-3/24	2
シーボルトの再検討	塚原東吾(東洋文庫研究員・神戸大学教授)	1/14-1/28	8
江戸の書物2	清水信子	1/30-3/6	3
探検! 書物の森	會谷佳光・岡崎礼奈	2/4	2
中東・北アフリカ地域の都市と都市計画史	松原康介(筑波大学准教授)	2/14-4/17	3

F. 研究者の交流および便宜供与のサービス

1. 長期受入

(1) 外来研究員の受入

周 艶 (南京大学図書館研究員)

「東洋文庫所蔵の善本調査」

(2013年4月1日～2013年6月16日)

[受入担当：田仲一成]

蘇 基 朗 (香港科技大学教授)

「中国近代出版文化史」

(2013年5月13日～2013年6月28日)

[受入担当：斯波義信]

吳 景 平 (復旦大学歴史系教授)

「中国歴史文献学」

(2013年5月17日～2013年5月31日)

[受入担当：岸本美緒]

彌永 信美 (フランス国立極東学院東京支部長)

「日本仏教」

(2013年9月1日～2014年8月31日・延長)

GIRARD, Frédéric (フランス国立極東学院教授)

「日本仏教」

(2012年9月21日～2013年9月20日、極東学院)

宋好彬(高麗大学校民族文化研究院研究員)

「朝鮮本古典籍の調査」

(2013年9月1日～2014年9月30日・延長、高麗大学校)

[受入担当：藤本幸夫]

(2)2013年度日本学術振興会特別研究員PDの受入

池尻 陽子(筑波大学大学院 PD)

「チベット仏教僧の思想とネットワークが清代内陸アジア史に与えた影響に関する研究」

(2010年度採用、11・12年度・3ヵ年間)

[受入指導者・吉水千鶴子]

※育休中につき受入期間を延長。2014年度終了予定。

村上 正和(東京大学大学院 PD)

「清代中国社会と演劇文化」

(2011年度採用、12・13年度・3ヵ年間)

[受入指導者・山本英史]

亀谷 学(北海道大学大学院 PD)

「パピルス文書による初期イスラーム時代統治システムの研究」

(2011年度採用、12・13年度・3ヵ年間)

[受入指導者・後藤 明]

小林 隆道(早稲田大学大学院 PD)

「10-13世紀中国における統治と「文書」—官文書分析による史料批判学の再構築—」

(2011年度採用、12・13年度・3ヵ年間)

[受入指導者・岸本美緒]

熊倉 和歌子(お茶の水女子大学大学院 PD)

「14-16世紀エジプトにおける徴税と村落社会：土地台帳をてがかりに」

(2012年度採用、13・14年度・3ヵ年間)

[受入指導者・林佳世子]

※就職につき、2013年度をもって身分を辞退。

小林 晃(北海道大学大学院 PD)

「12～15世紀中国における華北・江南の政治的統合過程」

(2012年度採用、13・14年度・3ヵ年間)

[受入指導者・山本英史]

五味 知子(慶應義塾大学大学院 PD)

「17～19世紀中国基層社会における規範とジェンダー」

(2013年度採用、14・15年度・3ヵ年間)

[受入指導者・岸本美緒]

2. 外国人研究者への便宜供与

China	王為民[中国山西大学副教授](ほか15名)
Iran	ALIMARDI, Mohammad Mahdi [Professor, Adyan University](ほか9名)
Taiwan	LAVELLA, Peter [台湾中央研究院近代史研究所研究員]
Tunisia	TARCHOUNA, Mahmoud [Professor, Universite Manouba]
Vietnam	SON, Tran Duc Anh [ダナン社会経済研究所副所長](ほか2名)

VI. 地域研究プログラム

A. イスラーム地域研究資料室

「イスラーム地域研究史資料の収集・利用の促進と史資料学の開拓」

本研究では、イスラーム地域の現地語史料について、書誌情報や文献情報の体系化を進めることによって研究の基盤を作り、同時に史資料の体系的な収集や利用のための環境を構築する。史料群を地域社会全体を表す縮図と捉え、これを体系的・俯瞰的に研究することによってイスラーム地域の重層的な像を解明することを目的とする。

[研究実施概要]

- a) 現地の出版状況や、現地及び海外の研究動向を踏まえ、現地語資料および欧文研究書等の収集と整理を行った。「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」は、データの更新と検索語の表記ゆれに対応するシステム改修を行い、登載文献数は5万件を超えた。本拠点が第一期から蓄積した史資料収集と文献情報システムに関わるノウハウを、拠点関係者の共同執筆により一般向けに書き下ろした『イスラームを学ぶ: 史資料と検索法』(「イスラームを知る」シリーズ)を刊行したことは今年度の大きな成果といえる。目録作成のノウハウの蓄積や、文献情報の発信の取り組みの成果として、PNC2013NIHU企画セッションにて発表を行い、毎年恒例のアラビア文字資料司書連絡会では、資料整理のノウハウの共有だけでなく、大学・研究機関間でのリソースの共有といった課題が提出され、東洋文庫拠点が更なる役割を果たすことが期待されている。拠点ホームページのリニューアルにより、研究成果や研究動向をより迅速かつ容易に発信できるようにした。学生と直に接して文献の検索方法や文献リストの作成方法を教える情報リテラシーセミナー(通算3回目)を開催し、研究の基礎となる文献検索スキルの向上を図った。
- b) 史料研究では、昨年度に引き続きオスマン民法典の翻訳を目的とした「シャリーアと近代」研究会を計4回行い、多分野の研究者や法実務家の共同作業によって「賃約の書」の最後(611条)までの訳文を完成させた。同じく多分野の参加者からなるオスマン史研究会、近代中央ユーラシア比較法制度史研究会、中央アジア古文書セミナー、オスマン文書セミナーも開催した。これらのセミナーは学生が普段触れることのできない文書史料の読み方を学べる貴重な機会として定着し、学部生の参加も増え、史資料研究の裾野の広がりが見られる。本年度より「イスラーム圏におけるイラン式簿記術の成立と展開」研究会との連携も行い、扱う史資料もより多彩になっている。さらに、ラホール国際会議でのセッションに加え、国際セミナー「ワクフとイスラーム経済」の開催、北米中東学会のラウンドテーブルの共催など、国際的な史資料のネットワーク形成にも努めた。

B. 現代中国研究資料室

「日本における現代中国資料の情報・研究センターの構築」

資料の長期的系統的分析による現代中国変容の解明」

中国研究に関するウェブやデータベースに関する情報を交換し、研究者の知見を広めるために、国内外の研究者・実務家を招いての国際シンポジウム及び小規模なワークショップを開催する。また東洋文庫所蔵及び新規収集の一次資料に基づいた共同研究会を継続して開催し、資料の読解能

力を高め、若手研究者の養成をはかる(年数回)。また、データベースや文献資料以外に、現代史研究に必要な資料の史料学的研究を進めるセミナーなどを開催する。

[研究実施概要]

- a) 資料利用環境の整備および国内外諸機関との連携については、国立情報学研究所との連携により NACSIS-CAT への書誌登録を継続して行った。本年度中に約 5,400 タイトルの東洋文庫近代中国研究委員会(現・近代中国研究班)収集資料が登録され、登録タイトル数は 49,000 件あまりとなった。
- b) 電子図書館についても、引き続き拡充に努めた。画像をインターネットで完全公開している資料は 489 タイトルに増加した。また目次から検索できるシステムの整備など、利用環境の向上を継続した。
- c) 資料研究活動については、5 つの研究班のもとで活発に行った。研究班体制の二年目として、初年度の実績をもとに、他機関・他大学との共催も含めて計 25 回の研究会・シンポジウムが開催された(江南地域社会班 5 回、図画像資料班 5 回、ジェンダー資料班 8 回、政治史資料班 3 回、1950 年代史料班 4 回)。
- d) 活動の成果として、近代中国の知識人が残した手書き日記の一部を活字化し注釈をつけた「王清穆『農隱廬日記』(3)」を『近代中国研究彙報』に公表した。また「柏原英一(1914～2009)写真帳」、「『亜東印画輯』データベース」の二つの画像データベースを公開した。さらに、来年度以降に向け、英文著作の翻訳出版、基本史料の解題出版、大学における講座の開催、データベースの拡充などの形態で成果を公表する準備作業を行った。東洋文庫研究部との協同で行っている所蔵資料「汪政権駐日大使館文書」の目録作成事業も継続し、出版を見据えた活動を開始した。
- e) 2012 年度に導入した『申報』データベースを東洋文庫の閲覧室にて一般の利用者が利用できる体制を整えた。

2013年度公益財団法人東洋文庫特別事業報告書

公益財団法人 東洋文庫
理事長 榎原 稔

2013年4月1日から2014年3月31日までに行われた公益財団法人東洋文庫特別事業報告の概要は下記の通りです。

事業内容

I. 特別調査研究並びに研究成果の編集等

A. 日本学術振興会科学研究費補助金による事業

1. 研究成果公開促進費(データベース等)の対象事業

「東洋学多言語貴重資料のマルチメディア情報システム」

[東洋文庫電算化委員会委員長: 斯波義信]

「宋代中国の統治と文書」

[研究代表者: 小林隆道(日本学術振興会特別研究員PD)]

2. 基盤研究等の対象事業

(1) 「1910～1930年代における日本の中国認識-華北地域を中心に」

[研究代表者: 本庄比佐子]

(基盤研究(B)、2009年度採用、5ヶ年間・最終年度)

(2) 「「モノ」の世界から見た中世イスラームの女性～ガラス器と陶器を中心に～」

[研究代表者: 真道洋子]

(基盤研究(B)、2011年度採用、4ヶ年間・第3年度)

(3) 「イスラーム法の近代の変容に関する基礎研究: オスマン民法典の総合的研究」

[研究代表者: 大河原知樹]

(基盤研究(B)、2011年度採用、3ヶ年間・最終年度)

(4) 「ワクフ(イスラーム寄進制度)の国際共同比較研究」

[研究代表者: 三浦 徹]

(基盤研究(B)、2013年度採用、5ヶ年間・初年度)

(5) 「江戸時代知識人の清朝史研究と近代日本における東洋史学」

[研究代表者: 楠木賢道]

(基盤研究(B)、2011年度採用、4ヶ年間・第3年度)

(6) 「ジャウイ史料の利用によるマレー民族の形成過程の研究」

[研究代表者: 坪井祐司]

(若手研究(B)、2012年度採用、4ヶ年間・第2年度)

(7) 「衛星写真とスタイン・ヘディン地図を用いた探検隊調査地の解明に関する基礎的研究」

[研究代表者: 西村陽子]

(若手研究(B)、2010年度採用、4ヶ年間・最終年度)

2013年度東洋文庫研究資料収集一覧

(2013年4月～2014年3月の一カ年間)

費目	項目	図書	雑誌	CD-ROM等	計	備考
文部科学省補助金事業費 超域アジア研究部門	総合アジア圏域研究	8冊	0冊	0件	8冊	1,188,220円
	現代中国の総合的研究	140冊	0冊	0件	140冊	1,482,100円
	現代イスラームの超域的研究	555冊	100冊	0件	655冊	2,596,690円
	アジア諸地域歴史・文化研究					
	東アジア研究部門	399冊	0冊	0件	399冊	3,767,311円
	内陸アジア研究部門	83冊	0冊	4件	83冊、4件	1,015,697円
	インド・東南アジア研究部門	105冊	2冊	27件	107冊、27件	1,034,072円
	西アジア研究部門	462冊	0冊	0件	462冊	1,061,895円
	共通 (継続・大型資料)	387冊	1,203冊	0件	1,590冊	9,307,350円
	地域研究プログラム					
	イスラーム地域研究資料室	376冊	46冊	0件	422冊	2,058,989円
	現代中国研究資料室	22冊	17冊	0件	39冊	736,800円
	資料交換	3,846冊	2,431冊	78件	6,277冊、78件	
	合計	6,383冊	3,799冊	109件	10,151冊、109件	購入費合計 23,481,763円

※東洋文庫より国内外の研究機関に寄贈した東洋文庫出版物は、単行本・定期刊行物を含めて、2013年度1年間では、国内4,406冊、国外2,709冊、計7,115冊(送料等経費 3,658,982円)でした。